

私の幼児教育論

三宅和夫

私は幼児教育論を語るに値するような専門家だとは思っておりません。ただ大学を卒業してこれまでの二十数年間発達心理学を研究しながら幼児にふれ、また幼児を通して母親や先生に接する機会は多かったと思います。そこで、そのような幼児とのふれ合いから、私が得た幼児観とでもいったものについて、すこし述べることにはしたいと思います。

幼児を直接に対象とした心理学の研究をするようになったのは、当時北大の教育学部の教授をしておられた城戸幡太郎先生の助手として北大に勤務するようになってからです。改めて申すま

でもなく城戸先生は教育心理学者として有名な方ですが、幼児教育には特に深い関心を持っておられ、独特な幼児教育についての考え方を展開された方です。先生は北大へ来られて間もなく構内に札幌市から払い下げを受けた古電車を三台設置して、近所の子どもたちを対象に保育の試みを始められました。

当時は幼稚園や保育所に通う子どもはごく少なく、遊び場もあまりありませんでした。先生は広大な北大のキャンパスを子どもたちにとって絶好の遊び場と考えられ、その拠点として古電車を置くことを思いつかれたようです。私が赴任したのは、そのような試みが一応軌道に乗ったころでしたが、城戸先生が助手としての私に言いわたされた第一の注文は、子どもたちの面倒を見るということでした。これが私が発達心理学、特に幼児の発達の心理

学的研究の道へと進んでいくきっかけになったのです。

ところで城戸先生は広いキャンパスの中で幼児が思う存分活動すること、芝生の上で取組みあったり、木登りしたり、土いじりをしたりすること、冬になれば雪あそびをすることなどを期待しておられたようです。室内遊びの場所として古電車で充分だと考えておられたわけではないにしても、むしろ外で自発的に子どもたちに活動させることこそが大切なことだと思っておられたようです。

このことは私にとっても、全く新鮮な経験でした。子どもたちにとびかかられたり、けとばされたり、ネクタイを引っぱられたり、最初はいささか音をあげましたが、子どもたちの自発性、活動力、創造力を示すいろいろな事例に接することができたのはその後の研究の中で問題を設定するのに大いに役立ったと思うのです。そして子どもの研究は子どもの現実の生活にふれ、そこから問題を発見するのではなくては本物とはいえないということも学ぶことができました。

二

教師をしている人にとってはごく当り前の常識だと思えますが、子どもには個性があること、そしてそれには彼らの家庭を中心とした経験が色濃く反映していること、したがって子どもに効果的に働きかけるにあたっては、それらのことをよく考慮することが必要であることなどについても、私は北大での子どもとのかわりの中で学んだのです。当時は、今よりも行動主義的な学習心理学がさかんな時代であり、その影響もあって、幼い子どもはおとなから教えられ、訓練され、しつけられる存在、つまり外から与えられる刺激に受動的に反応する存在とみる傾向が強かったように思います。私も知らず知らずに、そのような子どもに対する見方をしていたのかもしれないが、それを改めるうえで、子どもたちにかかわったこと、そしてお母さんたちからいろいろと学んだことが大きかったと思います。

こうして幼少期の経験が後の発達にどのように反映するのかというような問題に私の興味は向かっていきました。そこで私がそのころ行なった研究の一つについて簡単に紹介してみることになります。さきに述べましたように私は子どもが自発的にやりたいことを思いきりやるということは、自分の環境へ及ぼす力を認め、また自分のまわりの環境についての認識が深められることになると考えていましたし、実際幼児のころにそうであった子どもが小

学校へ入ってからよく学校生活にも適応し成績もよいという例をいくつか見てもいました。

そこで北大で幼児期を過ごした子どもを小学校入学後できるだけ長く追跡的にしらべてみることにしました。もともと一〇〇人ほどの子どもを毎年くりかえしてしらべるのはなかなか大変で、完全に収集できたのは毎年個別に知能検査を行なって得られた知能指数(IQ)だけでした。私が注目したのは数年の間にIQの上昇する子どもと、IQが下降する子どもでした。まず彼らの入学前後における行動の特徴との関連を検討してみたところ、IQ上昇群の子どもは下降群の子どもより自主性や達成動機(高い目標の達成にむかって努力しそれに成功しようとする願望)がすぐれているということが分かりました。つまり幼いころに自主性や自発性があり、がんばって物事をやりとげようとする意欲のある子どもに、次第に知的な水準が高くなり、反対にそのような特徴を幼少期に欠いている子どもの知的水準は次第に下るということなのです。

ところで、このように重要な子どもの自主性や達成動機というもののはどのようにして形成されてきたものなのかということが私の知りたいことでした。私はこの子どもたちの母親から自立や達成について、どのような期待を子どもに対してしており、またど

んな働きかけをしているのかについての情報を集めました。具体的に申しますと「仲間の言いなりになるよりも自分の考えをはっきりと主張する」、「少々つらくても助けを求めず、独力でがんばる」などいろいろの項目について母親が自分の子どもに対して何歳ぐらいからしつけをすることを必要と考えているかなどのことをしらべたのです。

結果は、このような子どもに対しての期待やしつけを早期にすることと子どもの自主性や達成動機の発達とはっきりとした関係があることが明らかになりました。このことをさきのIQの変化についての結果とあわせて述べますと、母親の子どもの自立や達成についての期待やしつけが早期になされた方が、子どもの自主性や達成動機の発達を促進し、そのことは子どもの知的発達にもよい結果をもたらすということになります。この研究は今ふりかえってみると、方法的にいろいろ問題がありますが、その後の私の研究の出発点としては意味のあるものでした。とにかく幼少期に母親はじめまわりの大人があまり干渉したり、行動を制限したりしないで、子どもが自発的、自立的に環境にかかわる自由を認めてやるのが大切だという私の考えはさらに強くなりました。

さきの研究においてもそうでしたが、どのような幼児がのぞましいのかということ、その子どもが後にどのような発達をとげるかということと無関係に考えるわけにはいかないのです。そして、そのような問題を扱う場合には、同一の子どもを長期間にわたって研究の対象として考察しなければなりません。これがいわゆる縦断的研究といわれるものです。私はそのような研究が日本にはほとんどないのでぜひやってみたいと考えました。そして、そうすることによって幼児期にどんな経験をすることが大切なのかを明らかにしたかったです。

この研究では母子関係ということに焦点をあててみることにし、はじめて妊娠した人たち五十名を対象として選り研究を始めました。現在この人たちの子どもは十歳前後になっていますが、そのうち二十三組の母子については、これからも継続して研究が行なえそうです。私は、子どもの乳児期、幼児期、学童期と、くりかえして観察、面接、検査などを行ない、母子関係や子どもの行動特徴についての資料を集め分析検討してきました。これまでに分かったことで、さきの研究の結果とも関連させてみると興味

深いことは、子どもが九歳近くになったときに把握られた行動特徴と乳幼児期からの母親の子どもへのかわり方との間に関係があるということです。

具体的に申しますと、子どもに押しつけ的にかかわらないで、できるだけ子どもの自発的行動を促し、子どもから母親への働きかけによく受け応えてそれを発展させるように配慮する母親の子どもは、学童期に獨創性、好奇心、応答性、自己充足性などが目立ち、IQも他の子どもたちより高いということが分かりました。また、これとは逆に子どもに押しつけ的に働きかけ、子どもの欲求にあまり配慮することなく一方的に指示したり統制することが多い母親の子どもは、さきの子どもたちにあったような特徴が目立たず、IQも他の子どもたちよりも低いということも明らかになりました。この研究では母子が相互交渉するような場面を設定して細かくその様相を把握したわけで、しかもそれを入学まではすくなくとも一年一回、その後もできるだけくりかえして行なってきたるわけで、前のIQの変化についての研究とくらべれば、かなり子どもの発達にかかわる条件を具体的に検討できたと思います。

今までの分析から得られたことを一応の結論として述べてみますと、母親が子どもの行動や要求によく配慮して的確に働きかけ

たり応答してやること、ならびに一方的圧力的にかかわらないこととの二つが子どもの行動の発達にとって望ましいということになります。このことは母親だけではなく、父親さらに先生にも当てはまるのではないかと思いますが、そのことをこれからの研究でたしかめてみたいと考えています。

四

ところで、世界中どこへ行っても子どもは子どもであり、子どもにとって望ましい環境とか母親の働きかけも共通であるように思われるかもしれませんが、でも考えてみれば、社会が違えば、文化や生活様式が異なり、子どもが生まれたときから育つ環境もそれぞれに違っているわけですから、ある社会で望ましいしつけの仕方が別の社会でもそうであるとは限らないのではないのでしょうか。

私は二十年ほど前に一年半にわたってユネスコの仕事で東南アジアに行っておりました。そして、子どもの、家庭や学校での生活についていろいろと調べたことがあります。日本の子どもについて当てはまるのが、全然当てはまらなかったり、親のしつけや育児の仕方が非常に異なることを知っておどろいたものでし

た。そして子どもは、その置かれている環境と相互交渉をしているのであり、子どもの発達を考えると、その特定の社会的文化的環境との関係で扱う必要があるのだということを改めて認識しました。そうであれば他の国で望ましいと考えられているしつけや教育の方法が、日本においても効果的だというわけにはいかないわけで、外国直輸入ではいけないことになります。また同じ日本の中でも地域的にはこの点について違いがあるはずです。

こうした問題について、私はいくつかの研究を行ってきました。そのうちの一つは、日本の幼児と母親の関係とアメリカの幼児と母親の関係についての比較研究です。これは日米双方の数名ずつの研究者の共同プロジェクトの一部で、私も北大関係の者が担当したものです。私どもは四歳の幼児と母親を対象として、母親にひとつの遊具をわたし、子どもと自由に遊ぶように指示して、母子の相互関係を観察しました。遊具は、六十四個の穴のあいた板と、そこにさし込むことのできる赤、黄、青、緑のたぐさんの小さい円柱からなっており、これらの円柱でいろいろな模様などをつくることができます。

母親によっては子どもに直接的に指示することの多い人もあり、また子どもに自由にやらせて見守る人もありました。私どもは日米それぞれの母子についての観察の結果を細かく分析して、

言語的交渉を中心に行っていると検討しました。これとは別にこのプロジェクトでは子どもたちの知的発達について五歳、六歳のときを中心に行っているのテストなどで資料が集められていました。

これら母子関係、ならびに子どもの知的発達の資料についての統計的処理の結果、日米の間にはつぎのような異なる傾向があることがわかったのです。すなわち、日本で幼児の知的発達を促進する母親の働きかけとしては、子どもによく受け応えしてやりながら、子どもの行動が展開するようにする配慮的なかかわりで一方的指示的に圧力をかけないかかわりというものが浮かんできました。これは前の縦断的研究の結果と一致しています。

これに対してアメリカにおいては、母親が子どもをリードし直接的に指示することがある一方で、よく子どもの状態に関心を払い配慮するということが子どもの知的発達を促進するということが明らかにになりました。つまりどちらも子どものことをよく配慮するという点が望ましいということでは共通に見えますが、日本ではあまり直接的指示的な働きかけは効果がなく、むしろ間接的指導的なやり方がよいのに対して、アメリカでは直接的指示的な働きかけがよいということなのです。

このような日米間の違いがなぜ存在するのかを解釈するには子どもが生まれてから三、四年間にどのような経験を母子関係を中

心として得てくるのかをくわしく検討しなくてはなりません。他のいくつかの研究を参照しながら考えてみますと、このような違いを生む一つのことばは、日本における乳幼児期のしつけが子どもに親に対する依存を求めるものであるのに対して、アメリカにおいては親からの自立を求めるものであるということではないかと思われまふ。そこでアメリカの幼児が自律的自己主張的になり、日本の幼児がどちらかと言えれば自己抑制的他律的になるのではないのでしょうか。ですからアメリカの幼児は母親から、かなり直接的な強い指示を受けてもそれを自分の自主的判断をする際材料とすることにより積極的に行動することができるようになり、日本の幼児は母親に受け容れられ、承認され、元気づけられることによつてはじめて自律的な行動に向かうのであり、直接指示的に圧力をかけられると自発的に活動できなくなるのではないのでしょうか。

このような結果は子どもの発達にとつてなにか有効かということとは、その子どもの環境との相互作用による経験との関係によつてきまるといふことを示唆するように思えます。私たちは、幼児に対する時、どんな環境の中にいるのか、どんな経験をしてきているのかといふことを常に考慮して、どのように働きかけたらよいかを決めていかなくてはならないと思います。(北海道大学)